

権威化する辛亥革命——安民布告と李西屏を中心に

Authoritative Xinhai Revolution: A Research on Notice to Reassure the Public and Li Xiping

坂本 秀幸

SAKAMOTO Hideyuki

武昌起義において都督に推された黎元洪が、実質的な清朝からの独立宣言となる安民布告への署名を渋り、それに苛立った李西屏が黎に代わって署名し、満座の喝采の中でそれが布告されたという逸話は、その逸話の舞台となった湖北省諮議局が改装されて利用されている『辛亥革命武昌起義紀念館』内に、布告書とそれに代署した李の肖像写真が並んで展示されている程、公的に認知もされ、広く知られた逸話である。しかし、初版時と再版時における『中国国民党史稿』に記録された安民布告発布の状況の違いや、様々な人物が残した回想録を分析すれば、この逸話が、一九二〇年代から一九四〇年代にかけ徐々に形成された「物語」であることが理解されよう。その背景には、物語の主人公である李西屏が、国民党から共産党へという政権移動の中で、政治的権威を獲得した軌跡とも重なった、辛亥革命という歴史的事象の「権威化」が存在している。

はじめに

辛亥革命に関する評価は、共産主義を標榜する中華人民共和国の誕生というあまりに巨大な歴史的事件の発生により、共産主義国家の誕生に対する評価に付随するもの、すなわち、共産主義革命に先行するブルジョワ民主主義革命とされてきた期間を持つものであった。

近年では、ブルジョワ民主主義革命を経て共産主義革命に至るという唯物論的史観の衰退に加えて、孫文を中心とする革命派の動向に偏重した研究に対する反省から、革命派との対比で立憲派、あるいは守旧派とされてきた人々の革命に対する貢献の見直しや、袁世

凱の再評価も行われている。また、台湾における教科書問題に端を発した、辛亥革命という言葉の使用そのものに対する疑義の表明などが行われ、二十世紀初頭の中國大陸における政体の大変動である辛亥革命に対する研究は多様化している^①。

直近では、後に帝政復活を謀った袁世凱と比べて、従来は民主側、先進側との評価を受け、あまり批判の対象とされてこなかった宋教仁が率いた国民党に対しても、その選挙戦の手法や、選挙後の振る舞いについて、多くの国民から幻滅を招き、それが帝政の復活につながったといった研究も現れている^②。

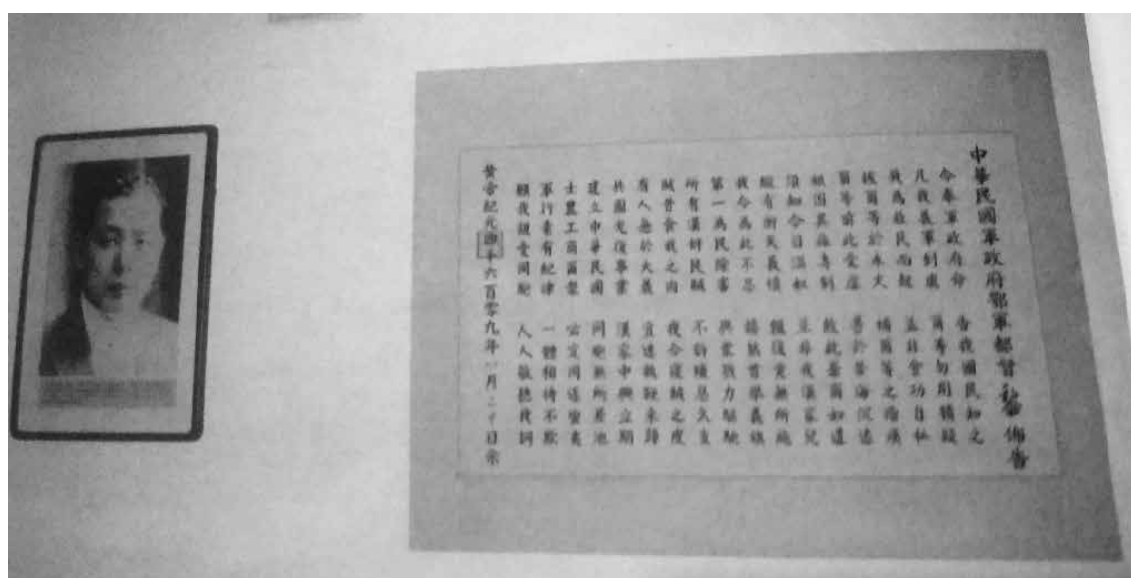
筆者は、武昌起義前後に発行された新聞紙上における革命・光復・共和といった言葉の使用法の分析や、孫文の死後、北伐前後にお

る国民党政権の宣伝活動を通じて、辛亥革命という言葉が、元来は、武昌起義そのもの、広義でも清朝側との和議までに起こった反乱行為を指して用いられていたものが、偉大な革命家孫文によって成し遂げられた中華民国建国の革命というところまで、意味するところを変化させていったプロセスの解明に取り組んできた、換言すれば辛亥革命の「物語化」こそが筆者の研究テーマである。その一端として、留日中国人留学生による辛亥革命時の赤字活動の記録からも辛亥革命の「物語化」のプロセスが垣間見えることを紹介した³⁾。

本論では、革命派兵士として武昌起義に参加した李西屏なる人物が、辛亥革命という大きな「物語」、すなわち、先覚者孫文によって成し遂げられた中華民国の創造として再構築されていく歴史の中に、自らの功績を刻み込み、また、それを根拠にして新中国誕生後の湖北省で大きな影響力を持ったことを論証する。それは、辛亥革命という概念が、事実から乖離した「物語化」を経たうえで流布し、やがて権威化していった過程をも示すことになるであろう。

1 李西屏と辛亥革命

武昌起義において都督に推された黎元洪が、実質的な清朝からの独立宣言となる安民布告への署名を渋り、それに苛立った若い革命派の兵士が、黎に代わって署名し、満座の喝采の中でそれが布告されたという逸話は、その逸話の舞台となった湖北省諮議局が改装されて利用されている『辛亥革命武昌起義紀念館』内に、布告書とそれに代署した兵士の肖像写真が並んで展示されている程（※写真参照）、公的に認知もされ、広く知られた逸話である。そして、その



辛亥革命武昌起義博物館展示（『李西屏文集』より）

肖像写真の人物こそが李西屏である。

陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』（浙江古籍出版社二〇〇五年）によれば、李西屏（一八八八～一九六〇）は湖北省出身、名は翊東、字は行。湖北省新軍の測量製図学校に入学し、革命組織共進会に入会、武昌起義には測量製図学校の学生を率いて参加、宋教仁暗殺に端を発した二次革命の失敗の後、アメリカに留学、一九二二年の帰国後は、孫文の広州大本営の技師となり、一九二八年には故郷の湖北に戻り、漢口市特別党部委員を始め、国民党内の様々な役職に就き、新中国成立後は中国国民党革命委員会に籍を持つ古参革命家として、湖北省人民政府委員等の重職についた人物である。

管見の限りにおいて、李西屏に関する研究は中国にも日本にも見当たらず、中国における黎元洪の事績の研究において、章太炎が作成した黎元洪の墓碑について、事実とかけ離れた称賛がされていることを理由に、章太炎にその書き直しを迫った人物として現れるのみである。⁴しかし、それでも共進会に属した元湖北新軍革命派の人物と簡潔に描写されるに留まり、現在まで研究の対象として取り上げられる機会は無かったように思われる。

本研究の端緒も、黎元洪について調査する中で、安民布告の発布について『中国国民党史稿』一九二九年上海民智書局出版の旧版に、「衆遂高呼挙為都督、黎嚙不作声、有一同志持一布告、請於都督下、署黎名、黎猶遲疑、蔡濟民以手槍擬之曰、事急矣、公若不為都督、則我等願死於公前、言時声淚俱下、黎頗感動、同志復有脅之者、乃挙筆書之」

訳文…衆がついに都督就任を声高らかに要請したが、黎は押し

黙って何も言わなかった。一人の同志が布告文を持ってきて、都督としての署名を黎に請うたが、黎はなお躊躇した。蔡濟民がピストルを手にして、「事は急を要します、あなたがもし都督になってくれないのなら、我々はあなたの前で自決します」と、涙を流して訴えたところ、黎は大変に感動し、同志には黎を脅すものもあつたので、ついに筆をとって署名した。

とあつて、李西屏は、黎元洪に代わって署名をするどころか、登場さえしていないにもかかわらず、一九三九年上海商務印書館により再版された『中国国民党史稿』では、

「衆遂高呼挙為都督、黎嚙不作声、李翊東手持一安民布告、請於都督下、署黎名、黎猶遲疑、蔡濟民以手槍擬之曰、事急矣、公若不為都督、則我等願死於公前、言時声淚俱下、黎頗感動、同志復有脅之者、乃挙筆書之」

と、布告文を持っていたのは李翊東（＝西屏）であると改変されていることを発見したことであった。

記念辛亥革命一百周年をうたつて、出版された武昌辛亥革命研究中心編『李西屏文集』（湖北人民出版社二〇一〇年）には武漢大学歴史系の教授、馮天瑜が序言を寄せ、

「先生力逼黎元洪出主湖北軍政府、代黎僉署第一份昭示天下的革命文告、此為辛亥首義的一段伝奇式佳話」

訳文…李西屏は黎元洪に湖北軍政府の主になるよう強く迫り、黎に代わって最初に天下に革命を昭かに示した文書に署名した。これは辛亥首義の伝奇的な美談である。

とあつて、新旧『中国国民党史稿』と並べれば、この安民布告に関する「伝奇式佳話」が、「誰かが持っていた布告文に黎元洪が署

名した」から、「李西屏が持っていた布告文に黎元洪が署名した」を経て、「脅しても署名を渋った黎元洪に代わって李西屏が署名した」と徐々に物語としての演劇性が整えられ、最終的にはその遺物が博物館に展示されうる公認性を持つに至ったことが読み取れる。

2 記録の中の安民布告

・李西屏『武昌首義紀事』における安民布告

先に紹介した『李西屏文集』には、日中戦争のさなかに執筆された、李西屏自身の武昌起義回想録である『武昌首義紀事』が収録されており、そこには、革命の勃発に動揺する測量製図学校生徒を一回喝してまとめ上げ、革命に参加させた活躍の他、安民布告発布における李西屏の役割が以下のように記されている。

衆擁黎至諮議局楼上、呼拳黎為都督、黎堅不承認、翊東乃持一宿写就之安民布告、上奉黎曰……請于都督御下、署一黎字。“黎畏縮舌顫曰……勿害我。”翊東怒、手秉長銃示之曰……汝視顏事仇、官至統領、豈大漢黃帝子孫耶？罪不容于死。今不汝罪、拳為都督、反拒絕之、豈非生成奴性、仍欲効忠于敵耶？余殺汝、別拳賢能。”蔡濟民、陳磊急掣翊東肘曰……慎勿発銃。“黎益瑟縮不語。翊東乃援筆代書一“黎”字、衆鼓掌称善、遂置黎于楼上室内、以戈守之。

訳文…皆が諮議局に黎元洪を連れて来ると、黎を都督に推す声があがったが、黎は堅く拒んだ、李西屏が書きあがっている安民布告の書を手にし、黎に奉って「どうぞ、都督名義で黎の一字のご署名を」と言うと、黎は恐れて舌を縮ませ震えて「我を害すること

なかれ」と言った。李は怒って手にしたライフルを見せつけ「あなたは無知ならずにも、漢民族の仇である清朝で官に就き、湖北新軍の統領にまで至った、それどうして偉大な漢族の始祖である黄帝の子孫だと言えるのか、死を逃れない罪であるのに、今、あなたを罪とせずに、都督に就けようというのに、それを拒むとは、生まれつきの奴隷根性じゃないか、まだ敵に忠義を尽くそうというのか、あなたを殺して、別の賢能な人物を挙げよう」と言ったので、蔡濟民、陳磊が慌てて「落ち着け、発砲するな」と李を制止した。黎はさらに縮みあがって、しゃべらない。ついに李が筆をとって黎の一字を代署すると、皆が称えて拍手した。そして黎は建物の一室に置かれて、守衛をつけて守らせた。

『中国国民党史稿』では自らの死を賭けて、洪る黎に署名を迫った蔡濟民が、李西屏の回想では、銃を突きつけて署名を迫った李を制肘した役割を担っている。どちらも非常に演劇的な描写であるにもかかわらず、人物の役割に一貫性を欠いていることから、どちらの安民布告にまつわる逸話も、事実から乖離して物語化されている疑念を抱かせる。

『中国国民党史稿』の作者である鄒魯も、校正者である胡漢民も、武昌起義に直接参加した人物ではない。したがって、『中国国民党史稿』の武昌起義に関する記述は第三者の伝聞情報を元に、鄒魯あるいは胡漢民による取捨選択の結果、記録に残されたものである。

『中国国民党史稿』（旧版）には、後に湖北軍都督にまつり上げられる黎元洪が、蔡濟民率いる革命軍兵士達によって、革命におびえ不様にも床（寝台）下に隠れている所を見つかったという記述があり、また、章末の注記には、一九一八年に執筆された熊秉坤の回想

録『武昌起義談』を引用して、黎元洪が別の人物によって寝台の下から発見されたという異説も記載している。

興味深いことに、引用元である熊秉坤の『武昌起義談』には、「黎初避不見、環懇再三、欲逸不得、始出見」（訳文・黎は最初出て行くことをさけていたが、なお再三にわたって懇願され、逃げようにもそれができないとあつて、はじめて出てきた）とあるが、『中国国民党史稿』の引用では、「黎初避入床下不見、環懇再三、欲逸不得、始出見」と、原文に無い「入床下」の三文字が書き足されており、『中国国民党史稿』の作者である鄒魯は、史料の改変をも憚らず、黎元洪を滑稽化して記録に残そうとした意図が窺える。

仮に、旧版が出版された一九二九年までに、後年、李翊東が回想したように、洩る黎元洪に代わって李西屏が安民布告に署名したという「物語」が存在したのなら、『中国国民党史稿』は、寝台の下に隠れ入っていた黎元洪の様に、安民布告に署名しなかった黎元洪を記録に残したと思われる。また、中華民国が誕生した後、湖北省内郡で革命派と黎元洪派の間に起こった権力闘争の中で、黎元洪を貶める為に、革命におびえて寝台の下で震えていたという床下都督の逸話を創造した湖北省革命派も、『中国国民党史稿』に先んじて、笑話として潤色し、床下都督同様に、震えて署名できなかった都督として、宣伝に利用したと思われるが、管見の限りそのような事例は見当たらない。

・様々な回想録中における安民布告

中国史学会が主編した『中国近代史資料叢刊 辛亥革命』（上海書店出版社一九五七年）と、全国・湖北省・天津市・武漢市・黄陂県政协文史資料委員会が合同編集した『民国大總統黎元洪』（中国

文史出版社一九九一年）には、辛亥革命に参加した人物の回想録が多く収録されているが、それらは黎元洪の都督就任に関してどう記述しているのか。黎の都督就任に至る前で記述が終了しているものは省き、その概略を羅列する。（※『中国近代史資料叢刊 辛亥革命』に掲載のものは「辛亥」、『民国大總統黎元洪』に掲載のものは「總統」とした。なお、李西屏の『武昌首義紀事』は「總統」に掲載されているがここでは省略した。また、両書とも回想録の執筆時期を示していないため、執筆時期は羅福恵・朱英圭編『辛亥革命的百年記憶与詮釈第三卷』（華中師範大学出版社、二〇一一年）第一章、第二章を参考に推定した）

① 一九二九年 吳醒漢『武昌起義三日記』（辛亥）

測量製図学校生は諮議局の守衛を務めて、おそらく、李西屏と陳磊の二人であつたろうが黎を罵ったり、銃で脅したりした。安民布告には衆議にしたがつて黎が印を押した。

② 一九一八年 熊秉坤『武昌起義談』（辛亥）（總統）

諮議局で軍政府設立の会議が開かれ、連れてこられた黎元洪は都督に推されたが、意を決せずにいた。副官の王安瀾が泣いて就任せぬよう諫めると、怒った面々が王を殺そうとしたが、黎が泣いてそれを止めさせた。みな黎の名で布告を発することとし、黎にはどうすることもできなかった。

③ 執筆年不明 鄧玉麟『辛亥武昌起義經過』（辛亥）

陰曆二十日午前十時、皆で都督を黎元洪、民政担当を湯化龍に推し、軍政府の成立を宣告した。

④ 執筆年不明 劍農『武漢革命始末記』（辛亥）

軍官達は革命がすでに成ったことを見て、統率を取ることがで

きなくなった。そこで、湖北新軍二十一混成協の協統であった黎元洪に都督就任を請うことにした。黎は事ここに到って、ついにそれを承諾したが、一般市民を不安にさせないことと、有力者達を集めて善後策を協議することを約束させた。

⑤ 一九四五年 張難先『湖北革命知之録』（辛亥）

諮議局において黎元洪は都督に推されたが、承諾しなかった、革命派兵士の朱樹烈が自刃し、血が飛び散ると、黎は驚いて身動きも出来なかった。李西屏が用意してあった安民布告を手に、都督名義の署名を迫ったが、黎は拒んだ。そこで、李が「私が代署するが、何か問題でもあるか」と言うと、皆は拍手で賛成した。李が代署し、書記がそれを清書して街中に張り出し、黎はどうすることもできなかった。

⑥ 一九二七年 曹亜伯『武昌革命真史』（辛亥）

諮議局で黎元洪は、皆から都督に推挙されたが、固辞し続け、再三にわたって帰宅したいと懇願するので、兵を付けて官舎に返し、厳しく警戒し武昌城の外に出ないよう厳命した。また一説では、諮議局で都督に推された黎元洪は「我を害することなかれ」と言って固辞し、李西屏がライフルを手に「あなたのよいうな満州族の奴隷は殺されて当然なのに、今、殺すどころか、都督に推されている、それでも断るといふあなたは、満州族の奴隷にあまんずるのか、私はあなたを殺して、呉兆麟を都督につける」と言った。黎は大いに驚き、陳磊と蔡濟民が李を制止した。皆は黎を一室に軟禁し、ついに黎の名義で布告した。

⑦ 一九四四年 章裕昆『文学社武昌首義紀実』（総統）

諮議局で黎元洪は都督に推されたが、承諾しなかった。諮議局

議長の湯化龍が現れ、革命軍の蔡濟民と協議し、暫定的に二つの機関を作ることとし、秘書処は湯化龍が処長となり、布告文を発し人心を安定させるなどし、謀略処は蔡濟民が処長となり、軍を指揮し、人心が落ち着いた。

⑧ 一九四四年 胡祖舜『六十談往』（総統）

黎は都督の就任を渋り、現状の安定化について請われても何も語らなかった。李西屏が用意してあった安民布告に黎に署名するように請うても、黎は拒絶した。李がライフルで脅すと、蔡濟民、陳磊らがそれを制止し、李が憤って代署した。

⑨ 執筆年不明 甘績熙『躬与辛亥武昌首義及陽夏慶之經過情形実録』（総統）

皆が黎を都督に推し、また、都督名義で安民の布告をすることに賛成したが、黎は畏縮し、声を震わせ「我を害することなかれ」と言って拒絶した。李西屏がライフルをとって脅すと、黎はおそれて初めて承諾した。

⑩ 執筆年不明 李春萱『辛亥首義紀事本末』（総統）

陰曆二十日には午前と午後には会議があった。午前は諮議局議員が多く参加し、議長の湯化龍の役職と黎元洪を都督に推挙することが議題となった。午後、少数の革命同志が会議し、議場の黎に都督就任を強く迫った。黎の承諾はないものの、軍政府は既に成立し、布告には都督名義の署名が必須であったから、李西屏が黎の一字を代署し、書記がそれを清書して街中に張り出した。

⑪ 執筆年不明 鄧漢祥『黎都督二三事』（総統）

諮議局で会議が開かれ、黎元洪が都督に推されたが、黎は頑と

して承諾しなかった。皆は黎が湖北人で、履歴や資質、人望が比較的高く、湖北に号令するのに相応しいと認めていたから、言葉を尽くして是が非にでも黎に就職を迫った。その中で陳磊、甘績熙等は黎を罵り、張振武、蔡濟民、李翊東等はさらに激しく黎に就職をせよと、黎は黙して答えない。ついに後は黎の署名をするばかりという安民布告の書面を黎に見せたが、かぶりを振り、手で払い、「湖北軍都督と書いてあれば、黎の署名など不要だろう」と言った。そこで銃を取り黎を脅す者があったので、傍らにいた皆で制止したので、それ以上、黎は何も言わなかった。

以上の十一例の中で、李西屏の回想録と一致する、安民布告の発布を記しているのは⑤張難先、⑧胡祖舜、⑩李春萱の三名のみである。おおよその回想録に共通しているのは、黎元洪が都督への就任を渋ったという点のみであり、李西屏が登場しないだけでなく、安民布告の発布にさえ触れていない回想録も存在する。

黎元洪は一九二八年に死亡し、その政治的影響力を失っており、一九二九年に出版された『中国国民党史稿』が床下都督の逸話を取り上げているように、黎元洪の功績を矮小化した記録を残そうとする傾向が存在したとしても、黎元洪の名譽の毀損に繋がるような記述が忌避された事情が、少なくとも一九二八年以降に書かれた回想録に存在したとは考えにくい。⑤にあるように、署名を渋る黎元洪の目前で、抗議の自死を遂げた革命兵士が実在したのであれば、その場に居合わせた全員の記憶に深く残り、武昌起義に関わった人物の回想録に記されないのは、却って不自然でもあろう。また、自死する人物の登場程に刺激的ではないにしても、安民布告の発布が実

は黎の手による署名ではなく、李西屏によるものだったという物語も、馮天瑜氏が述べるように充分に印象的な“伝奇式佳話”であり、だからこそ記念館に展示されているのもあろうが、それが実際の出来事であるにもかかわらず、回想録に記さないというのも、また不自然でもあろう。

一方で、回想録を執筆した各々が、自由に安民布告の発布を物語化させたとするなら、上記の三人が揃って、安民布告は代署され、代署したのは李西屏というように、物語化が一致しているのも奇妙である。人物の重要度を考慮すれば、『中国国民党史稿』が蔡濟民に命がけで黎元洪に署名を迫る役割を当てているように、李西屏より革命派のリーダーであった張振武や蔡濟民に代署させた方が自然である。もちろん、そのような果敢な振る舞いを物語の中で担当させるのに、李西屏が相応しい性格の人物として、革命派の中で知られていたという可能性はある。しかし、①にあるように、署名ではなく、押印という物語化の可能性もあったことを考えれば、安民布告の物語化は、李西屏と代署をセットにした方向性を目指して進んだことが窺える。

それでは、どのような力が働いて、安民布告の物語化は進んで行ったのであろうか。

3 安民布告の物語化

・一九二〇年代における物語化 — 曹垂伯『武昌革命真史』 —
そこで、注目に値すると思われるのが、⑥の曹垂伯『武昌革命真史』である。安民布告の逸話もなく、演劇的な場面を設けない描写

を本筋としながら、一方で、“一説には”として、本筋とは全くかけ離れた李西屏が黎元洪に強く都督就任を迫る物語を併記している。これは、曹亜伯が本筋として描写した内容とは異なる物語の挿入を、強力に曹亜伯に主張した人物の存在が推察される。

再版『中国国民党史稿』の第四篇は、総理である孫文を筆頭に、国民党の革命事業に由来を持つ人物の列伝が収蔵されており、そこに曹亜伯も取り上げられている。それによれば、一九二六年、国民革命軍が、曹亜伯の居る江蘇に進攻した際、曹亜伯は数千人の地元民をかき集めて国民革命軍に呼応しようとしたが、国民革命軍の指揮者に対する不満を見せ、上海総司令部に逮捕されるという経験をした。そこで抱いた新たに国民党内で兵柄を握った者が、古い革命人士をないがしろにしているという憤りから『武昌革命真史』を著したが、出版されると、すぐに発禁にされてしまい、それから自らの思いを世に問いかける意欲を失い、仏典に耽溺する日々を送るようになった。その頃、李西屏は上海にあつて、曹亜伯は昆山にあり、月に一度は必ず上海の章太炎の家で落ちあい、丸一日語り合うことを約していたとあつて、『武昌革命真史』の執筆時期と重なって李西屏との深い親交があつたことがわかる。

列伝にあるように、曹亜伯の『武昌革命真史』は出版後、国民党内の権力闘争の影響を受け、また多くの歴史家から内容に関する疑義を指摘されたこともあり、すぐに発禁処分となつた。^⑥①の呉醒漢『武昌起義三日記』も、その書中で、『武昌革命真史』の内容が真実とかけ離れた描写が多く、筆者の曹亜伯は武昌起義に関わった関係者から金をもらつたと、その人物の功績をねつ造することすらあつたと痛罵している。しかし、程なく国民党内の権力闘争が過ぎ去る

と、瑕疵はあるものの、武昌起義当時の貴重な資料が豊富に掲載されていることも事実ではあつたため、次第に史料価値を見出されるようになった。^⑦事実、一九三〇年二月二四日発行の申報に『武昌革命真史』の広告を見ることができる。一九一二年から一九四五年にかけて出版された武昌起義に関する書物の中で、最も影響力を持ったのは、曹亜伯の『武昌革命真史』と、⑤の張難先『湖北革命知之録』であつたとの指摘もある。^⑧

以上から、李西屏と親密な関係にあつた曹亜伯は、『武昌革命真史』に“一説には”という体裁をとつて、李西屏が語つた安民布告の発布に至つた経緯を挿入し、それは、以降の関係者による武昌起義の回想の物語化に少なからず影響を与えたことが推察できよう。

初版『中国国民党史稿』と『武昌革命真史』はほぼ同時期の出版だが、両書の内容からは、一九二〇年代後半では、物語化は、安民布告への代署にまで深化しておらず、黎元洪が都督就任を強固に渋り、脅されたという段階までしか物語化が進展していなかったことが読み取れる。安民布告は、黎が就任を渋つたことを強調するアイテムに過ぎず、そうであればこそ、①『武昌起義三日記』において、黎が安民布告に署名ではなく、押印しているのであろう。

曹亜伯が耳にした“一説”を唱えたと思しき李西屏自身は、『武昌革命真史』が執筆された一九二七年の段階で、すでに物語化を完了させていたが、曹亜伯が李西屏の語る“伝奇式佳話”をそのまま挿入することを憚つたとも、李西屏自身も回想の中の武昌起義を『中国国民党史稿』や『武昌革命真史』と同程度にしか物語化させておらず、単純に脅迫者として自身を登場させたとも考えられるが、いずれにしても、“伝奇式佳話”が一気に完成したものではなく、徐々

に形成されていたことが読み取れる。

仮に、李西屏の影響力が、たまたま、同じ江蘇にあつて、親密な交流があつた曹垂伯にだけ留まるものであつたとすれば、その後の、安民布告の物語化は、曹垂伯の『武昌革命真史』のみを契機として進んだことになるが、武昌起義に参加した人物達同士の間で、その後、交流が持たれる機会はなかつたのであろうか。

・安民布告の物語化の温床——「辛亥首義同志会」——

武昌起義に参加した人物が組織した団体の活動に関しては、謹徳「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」（華中師範大学碩士論文二〇一一年）に詳しい。

武昌起義が収束した後、最初に起義に参加した兵士達が組織したのは、傷病者の救護や、傷痍者への補償を目的としたものであつた。

武昌での戦闘が収束すると、すぐに辛亥鉄血傷軍委員会が組織され、武昌と漢口にあわせて三か所の休養所が設置され、八百名余の傷病軍人を収容した。裁兵策をとつた黎元洪は一九一三年、治療を終えた兵士の帰郷を促すとともに、傷痍の程度に応じた終身補償を許可していたが、同年十二月、黎元洪が袁世凱の要請に応じて北京に移ると、補償は途絶えた。その後、傷痍軍人達が各所に訴えを起こした結果、陸軍部は三年の補償、満期に至つてさらに二年の補償を決定したが、一九一八年には補償は完全に途絶えた。傷痍軍人達は武漢に集まり、路上での物乞いで暮らすようになったが、広州で孫文が南方政府を組織すると、傷痍軍人達の求めに応じ、武漢に辛亥首義傷軍善後督辦処の設置を許可したが、支払われる補償金は僅かであり、やがてその活動内容を社会からの募金活動を主とするようになった。^⑨

一方、補償ではなく、武昌起義の顕彰を目的とした組織は、軍閥間の戦争、北伐、日中戦争による国内混乱が一段落した一九四六年、張難先、郭寄生、李春萱、蔡漢卿、江炳靈ら三六名を発起人とした辛亥首義同志会の誕生による。正式発足に伴つた選挙により、組織の理事長に居正、代理理事長に何成濬、常務理事に李春萱、梁維垣等、常務監事に張難先等が選出された。^⑩

会の構成員は、基本会員と普通会员の別があり、基本会員は辛亥革命以前から秘密組織に参加していた者か、武昌起義時に軍事上あるいは政治上で著しい功績があつた者とされ、発起人三名以上の紹介があり、理事会による審査を経て会員となることができた。普通会员は、中華民国に対する功績があり、会への賛助を表明した者とされ、基本会員三名以上の紹介があり、理事会による審査を経て会員となることができた。^⑪

このような構成員から成つた辛亥首義同志会は、当時最大の辛亥革命記念組織であり、自身の独特な社会地位を利用して、記念活動を展開し、会の影響力の向上に努め、さらにそれを辛亥革命記念活動の全国展開へ利用した。^⑫

一九四六年の会の誕生は、それ以前の時期に、武昌起義に参加した者達の間で、辛亥革命の記念組織の結成を通し、会の発展と共に武昌起義の歴史的意義を顕彰することで、武昌起義に参加した自身の社会的地位のさらなる向上を目指す機運が共有されていたことを物語っているであろう。それは、辛亥首義同志会の発起人に名を連ねている張難先と李春萱を始めとする複数の人物の回想録が、一九四四年、一九四五年に執筆されていることが示している。

また、会への入会条件が、基本会員、普通会员共に、三名の関係

者による紹介を条件とすることが示しているように、この会は、いくつもの人間同士の交流の連なりを土壌として組織されている。一九二八年五月二十八日の申報は、「武漢近聞」という記事の中で、国民党の湖北省における人事情報を伝えているが、この時、湖北省の党務指導委員が張難先、漢口の党務指導委員は李西屏であることが記載されており、さらにこの後、触れることになる、新中国成立後の辛亥首義同志会の組織変更を考え合わせれば、張と李には遅くとも、一九二八年には、既に交流があつたことが窺われる。李西屏と同じ物語を共有している、三名のうち、張難先と李春萱は共に辛亥首義同志会の発起人であるが、この会の発会準備の前提となった人間同士の交流の連なりは、いわば武昌起義に対する記憶のすり合わせ、同一方向への物語化をすすめる温床でもあつたのではないだろうか。

ところで、再版『中国国民党史稿』の曹亜伯に関する列伝は「君歿于茲六年矣、莫有念其功者、其子弟又不能知其詳、翊東以交深、惧久湮没、乃銓叙其事為之伝」（訳：曹亜伯没六年にして、その功績に思いをめぐらす者が無く、その子弟もまた彼の功績をつまびらかにできない、李西屏は曹君と交際が深く、彼の功績が消えてしまふのを恐れ、曹君の功績をつまびらかにしたのでこの曹君の伝を為した）という一文で締め括られている。

この一文から、鄒魯が李西屏に再版『中国国民党史稿』の取材をしていたこと、そして、李西屏に対して信を置いていたことがわかる。そのような関係性によって、『中国国民党史稿』における安民布告の逸話が改変された理由は説明できるとも思えるが、再版『中国国民党史稿』の鄒魯の巻頭自序の日付は、民国二十七年（一九三八

年）であるから、一九二〇年代後半の「黎に都督就任を迫る李西屏」が、一九三〇年代後半には「黎に安民布告を手にして署名を迫る李西屏」にまで物語は進化し、ついには一九四〇年代に入つて、李西屏自身の回想録『武昌首義紀事』にあるように、「黎元洪の署名を代署した李西屏」へ到達したことが推測される。

・李西屏の辛亥首義同志会への関与

『李西屏文集』にある李西屏が自己申告した履歴表によると、李西屏は一九二五年、西山會議派が上海で開催した中国国民党代表大会に出席しており、元来は国共合作に反対した国民党西山派の人物である。一九二八年から一九三六年までは一貫して反蔣活動に身を置き、一九四七年に、漢口で中国国民党民主派に加入している。

その後、中国国民党民主派は、中華民族革命同盟等の流れをくむ三民主義同志連合会と共に内戦中に香港に脱出した反蒋介石左派グループと結集し、孫文の国共合作時の路線を復活させ、孫文の教えを発展的に継承させることを目指した中国国民党革命委員会、いわゆる民革を結成する⁽¹⁹⁾。

一九四九年五月、武漢三鎮が共産党の支配下に移ると、武漢軍事管制委員会は、張難先、李書城、耿伯釗、李西屏、江炳靈、熊晋槐、潘正道を整理委員に指名し、辛亥首義同志会整理委員会を設立させることを下達すると同時に、張難先を主任委員に、李西屏を秘書長に指定した。この整理は、民国誕生以降の三十八年間に及ぶ長期の革命戦争の混乱で、同志会の会員に入り込んだ、「起義時に敵対行動や逃亡した者」「帝政復活時に袁世凱に投降した者」「軍閥側のスパイとして働いた者」「日中戦争の混乱にまぎれて加入した者」「現政府に対して反動行為のあつた者」をあぶり出す為に行われ、

一九五〇年七月の整理終了の宣告までの間に、約千四百名を審査し、約八百名を不合格とした。^⑭

新中国成立以降、共産党は辛亥革命精神の高揚が統治に資するとして、積極的に辛亥首義同志会による武昌起義の顕彰事業を後援したが、国共内戦による国内の経済的疲弊が激しく、活動の中心は生活に困窮する同志の救済に向かわざるを得なかった。一九五〇年、湖北省政府が周恩来総理に、困窮した同志会を救うための食糧援助を求め、百トンの米が支給されることになった。翌年、湖北省人民政府と武漢市人民政府は、湖北省人民政府臨時救済武漢市辛亥首義同志会を組織することとし、張難先を主任委員、熊慶槐、鄺林を副主任委員、李西屏、江炳靈等を委員に指名した。^⑮

新中国誕生後の、辛亥首義同志会の人事変化からは、先にも述べた通り、張難先と李西屏の繋がりと、秘書長に抜擢される程の李西屏の共産党からの信認を窺える。共産党ではなく、民革に党籍を置く者の政治資源は、反蒋介石活動履歴と、辛亥革命時における功績であったと思われるが、李西屏自身の申告した履歴を信するなら、李の反蔣活動は、特務員による暗殺未遂が起こった程に活発であり、辛亥革命における自身の功績は、自著『武昌首義紀事』だけでなく、国民党時代から辛亥首義同志会の役員を務めた張難先の『湖北革命知之録』等を根拠に、黎元洪に代わって安民布告に署名したことを主張できたであろう。

辛亥首義同志会の活動からうかがえるのは、同志会のメンバーになることは、そのまま武昌起義に参加した古参革命家として公認されることであり、それは革命党の支配する社会にあつては特権的な身分の獲得につながるものであつたということであろう。そして、

新中国誕生後の整理活動では、少なくない申請者が審査に不合格となつており、審査条件、特に「現政府に対して反動行為のあつた者」という条件を鑑みれば、共産党の意向、より具体的に言えば、武漢軍事管制委員会から、それぞれ、主任委員、秘書長に指名された張難先と李西屏の判断が、その審査に強く影響したと考えられる。しかも、活動の中心が困窮する同志の救済であつた当時において、政府からの救済米の配布に関する差配も担当したとあれば、二人が語る武昌起義の物語が、武昌起義に参加した者から公然と異を唱えられたとは考えにくい。

このようにして、李西屏の安民布告代署の逸話は、武昌起義の生き証人達に公認されるようになったと思われるが、さらにそれを博物館に展示されるまでの「伝奇式佳話」に引き上げたものは何であつたか、新中国成立後の湖北省の歴史を俯瞰する。

4 新中国誕生後の李西屏の政治的權威

・新中国誕生後の湖北省における李西屏

新中国における最大の革命事業は土地革命であつたと思われる。

圧倒的多数を占める多くの農民を共産党の味方にする唯一の方法は、具体的には広大な農地を有する地主から土地を奪い、それを小作に与え、自作農に仕上げることであつたが、地主といつても程度に差があり、どこまでを土地没収の対象とするかの線引きが困難であつた。^⑯

湖北省地方志編纂委員会編『湖北省志・政党社團』によれば、湖北省では、一九五〇年の土地改革運動以降、一部民主党派人士、特

に知民人士及び商工業者が、土地改革問題の障害になり、農村清算闘争を惹起し、ある種の恐慌状態を招いた。湖北省共産党の幹部は、民主党派人士の自発的参加を基調として、学習させ、土地改革運動に参加させる中で問題意識を高め、目覚ましい効果を挙げたとあるが、その具体策の中に、李西屏の名前を見ることが出来る。

土地改革法と政務院『関于画分農村階級成分的決定』公布後、李西屏が招集人となつて宣伝・集会が複数回開かれた。土地改革に対する明確な態度と、農民を擁護しようというゆるぎない決意をもつて臨み、都市在住の農村地主と土地問題の円満解決の為に協力し助け合い、正直に清算を受け入れるように督促することで、農民の正義の闘争を支援した。¹⁸⁾

『湖北省史』の記述に基づけば、李西屏が中心となり、宣伝を繰り返し、民主派人士との集会の中で粘り強く理を尽くした説得の末に、目覚ましい効果があがつたかのであるが、同時期に起こった民革内部における、整風運動の様子に眼を向ければ、そこには、李西屏が問題解決にどのような態度で臨んだのか、換言すれば、なぜ、共産党が民主派人士が障壁となつた問題の解決に、李西屏を用いたのかの解答が潜んでいるであろう。

民革は中国国民党民主促進会、三民主義同志聯合会、民主革命同盟の三団体が一九四八年に合併した組織であったが、成員の規定が厳密では無く、成分が複雑あつたため、一九四九年の秋、民革中央は地方支部の活動を停止し成員整理を行うことを命じた。湖北省では、一九五〇年二月に民革湖北省分部籌備委員会の設立が民革中央によって決定され、中央から十一名の籌備委員が派遣され、五月六日に第一次籌備會議は開かれることになったが、その際の召集人と

して指名されたのは李西屏であつた。六月一日、民革湖北省分部籌備委員会が正式に成立し、成員の審査が行われた結果、三十五人の逮捕者があり、うち二名には死刑の判決が下された。一九五一年六月から八月にかけての整風運動でも三十名から党籍を剥奪、不良分子¹⁹⁾を洗い出した。

整風運動に伴う粛清は、共産党に固有の現象ではなく、この時期、民革にも存在し、党籍剥奪者だけでなく、二名の死刑判決者を出す程に苛烈なものであつた。一九四九年、既に辛亥首義同志会整理委員会の秘書長に指名される程、共産党との良好な関係を築いていた李西屏は、それを背景に、不良分子を粛清する程の力を持ち、土地問題を惹起した民党派人士に強権を発揮し、目覚ましい効果をあげた²⁰⁾ことが窺える。

中華人民共和国の政治支配の建前は、共産党と民主党派の連合体である政治協商會議に依つてゐる。湖北省では、一九五〇年の第一屆各界人民代表會議協商委員會が開かれてから、一九五五年の中国人民政治協商會議湖北省委員會への名称変更を経て、李西屏が死亡した一九六〇年までの間に、四期の委員會が組織された。李西屏は初回から駐会委員（委員會の名称変更後は常務委員）で有り続けたし、後半の二期に関しては副主席を務めている。²¹⁾一九五七年には、右派のレッテルを張られて自殺した民革籍の副主席耿伯釗が存在したことを考えれば、生涯に渡つて共産党との良好な関係を保つた李西屏が、第一屆全国人民代表大會の湖北省代表に選出されたように、省内民主派の中でもっとも権威を持った人物であつたことが指摘できよう。

人民代表會議協商委員會の「省政協的主要工作」によると、

一九五五年二月から一九五九年五月の第一屆省政協政治協商の一系列問題には、兵役法、新人民幣発行と旧人民幣回収などと並んで、辛亥首義老人生活安排問題、武漢地区六十二名起義軍官定級問題、省文史館館員生活待遇調整問題が記されている。⁽²¹⁾武昌起義にからんだ問題の提起は、経歴からして民革所属の委員によるものであったと考えられるから、武昌起義に関する記録に対する李翊東の影響力の強さが窺える。

・『辛亥革命武昌起義紀念館』と李西屏

安民布告と李西屏の肖像写真が展示されている辛亥革命武昌起義紀念館が、いつ頃から博物館利用されてきたのかを示す明確な史料は見当たらない。紀念館の公式サイト上でも、その始まりを、一九七九年三月七日に宋慶齡が、辛亥革命武昌起義紀念館という扁額を書いたことから開始しているが、一九六一年には、赤い煉瓦作りであることから、紅樓と呼ばれる建造物自体は、武昌起義軍政府旧址として全国重点文物保護單位に指定されている。⁽²²⁾しかし、紅樓は一九四九年以降、湖北省委員会の事務所兼宿舍として使用され、政府機関が紅樓から場所を移したのは一九八一年のことであった。⁽²³⁾また、博物館としての名称も、二〇〇一年、新たな辛亥革命博物館の建造にむけて、辛亥首義紀念館から辛亥革命武昌起義紀念館に改称したとあって、宋慶齡の扁額をその始まりとするのも疑問の残る所である。

仮に政府機関として使用に供されつつも、同時に武昌起義にまつわる文物の保存が行われ、博物館に類似した機能があったとしても、文化大革命の混乱で、展示物や博物館としての履歴史料が散逸したということは想像に易いであろう。

一九四九年十一月十日、李西屏は辛亥首義同志会秘書長の立場から、湖北省人民政府に、辛亥首義烈士祠内に湖北革命歴史博物館を付設することを提案し、その提案書の中で、辛亥革命の中国近代史上における重要な作用や、国外では革命の遺産の保護が重視されている例を説き、政府が湖北省革命歴史博物館を設立することを訴えている。一九五〇年五月六日、湖北省人民政府委員会第一次会議において、この提案は通過しているが、その後、湖北省革命歴史博物館なるものが設立された痕跡は見当たらない。⁽²⁴⁾

しかし、辛亥革命武昌起義紀念館の公式サイトに於いて、「本館大事記」として示されている年表では、一九七九年三月七日に宋慶齡による扁額の揮毫に続いて、同年八月一日、秘書長の李西屏と同時に辛亥首義同志会主任委員となった張難先の子息、張徹生からの辛亥革命に関する貴重品二十五点の寄贈が挙げられており、博物館としての辛亥革命武昌起義紀念館と辛亥首義同志会の関係性が窺われる。一九六〇年の李西屏の死後に、博物館としての機能が整えられたとしても、湖北省重鎮が語った武昌起義の内容を伝えるために、李西屏の肖像写真と安民布告の展示が行われるのは当然のことでもあったろう。湖北省内の李西屏の政治的地位を考えれば、政府機関として紅樓が使用されていた当時から、建物に由来した“伝奇式佳話”への顕彰として、展示がされていた可能性もあるだろう。

いずれにしても、湖北省辛亥革命歴史博物館の設立を願った李西屏の熱意は、李西屏の回想した武昌起義を、ついに辛亥革命武昌起義紀念館に、安民布告と肖像写真を展示するという形で報われたと言えるのではないだろうか。

おわりに

武昌起義に際して、都督名義で布告への署名を済る黎元洪に代わって李西屏が署名したという出来事に関しては、武昌起義直後に全くそのような逸話が語れる事が見られなかった上に、後年、回想録にその逸話を記す人物が複数存在はしても、内容に食い違う部分が多く、やはり、徐々に物語として形成され、それが完成したのは一九四〇年代に入ってからであり、さらに、それが一九五〇年代、李西屏の政治的影響力の高まりに付随して、公認されるような「伝奇式佳話」となったと考えられる。

それは、共産党が、国民党と「偉大な革命家である孫文が率いた辛亥革命によって清朝を滅ぼした」という歴史観を共有し、新中国誕生後も、辛亥革命に参加した人物を古参革命家として優遇したことで、徐々に権威化していった過程とも重なっているように。

李西屏は、武昌起義における自己の功績を物語化し、自身の政治的権威をもつて、それを博物館に刻み、歴史を作ったとも言えるが、それは、凡そ歴史と言われるものの創造に共通するメカニズムであるとも思われる。例えば、辛亥革命武昌起義紀念館の正面には、孫文の銅像が据えられているが、辛亥革命と孫文を密接に想起する多くの人に共有されている思考回路は、そのことに全く疑問を抱かせない。しかし、武昌起義勃発当時、孫文はアメリカに居て、武昌起義とは直接関係がない人物である。

大きな事件が起こり、その出来事に対しての解釈と検証がなされ、歴史叙述として定着していく為には、時間が必要であるが、その時

間が長きに渡って、革命政党である国民党と共産党の一方支配下で熟成されてきた辛亥革命は、多くの物語化が重層的に重なった事象であり、辛亥革命と孫文を密接に想起する回路は、既存の辛亥革命研究や、研究の前提となった史料にも少なくない影響を与えていると思われる。

- (1) 村田雄二郎「グローバルヒストリーの中の辛亥革命」(辛亥革命百周年記念論集編集委員会編『総合研究辛亥革命』岩波書店、二〇一二年) 収蔵
- (2) 王奇生「神聖」から「唾棄」へ」(深町英夫編『中国議會100年史』東京大学出版会、二〇一五年) 収蔵
- (3) 見城悌治・坂本秀幸「長崎医学専門学校中国留学生の赤十字隊と「辛亥革命」」(『千葉大学国際教養学紀要』第4号、二〇二〇年) 収蔵
- (4) 馮天瑜「黎元洪出任辛亥革命鄂軍都督始末」華中師範大學學報2010年第6期
- (5) 嚴昌洪「章太炎修改《大總統黎公碑》考議」歴史研究二〇一〇年第四期
- (6) 羅福惠・朱英主編『辛亥革命的百年記憶与詮釈 第三卷』(華中師範大學出版社、二〇一一年) 八十頁
- (7) 前掲『辛亥革命的百年記憶与詮釈 第三卷』八十二頁
- (8) 譚德「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」(華中師範大學碩士論文二〇一一年) 十三頁
- (9) 前掲「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」九頁
- (10) 前掲「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」二十一頁
- (11) 前掲「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」二十二頁
- (12) 前掲「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」二十三頁
- (13) 諸星清佳「中国革命の夢が潰えたとき」(中公新書、二〇〇〇年) 九十七頁
- (14) 前掲「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」四十一頁
- (15) 前掲「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」

四十七頁

(16) 横山宏章『中華民国』（中公新書、一九九七年）二百二十頁

(17) 湖北省地方志編纂委員會編『湖北省志・政党社团』（湖北人民出版社）百八十九頁

(18) 前掲『湖北省志・政党社团』二百九頁

(19) 前掲『湖北省志・政党社团』二百一頁

(20) 「中国人民政治協商會議湖北省委員會」前掲『湖北省志・政党社团』收藏

(21) 前掲『湖北省志・政党社团』四百五十二頁

(22) 羅福惠・朱英主編『辛亥革命的百年記憶与詮釈 第四卷』（華中師範大学出版社、二〇一一年）二百五十九頁

(23) 前掲「紀念辛亥革命活動研究——以辛亥首義同志会及相關紀念組織為中心」五十頁